

小学校英語科における文字指導

濱崎 孔一 廊 [鹿児島大学教育学系 (英語教育)]

阿久根 崇 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

金崎 英俊 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Alphabet and writing-related instructions in elementary school English classes

HAMASAKI Ko-ichiro, AKUNE Takashi and KANESAKI Hidetoshi

キーワード：小学校外国語（英語）科、文字指導、文字言語、形態構造、深い学び

1. はじめに

文部科学省 (2017a, b)に記されているように、小学校では高学年において外国語科が正式な科目とされ、書くことの指導が必要とされている。文部科学省 (2017a: 157)では、書くことの目標として次の2点が挙げられている。

- (1) (a) 大文字，小文字を活字体で書くことができるようにする。また，語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。
- (b) 自分のことや身近で簡単な事柄について，例文を参考に，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

オーラル・コミュニケーションに関しては、これまでの外国語活動を通して、その素地を育む方法も開発され浸透しているであろう。しかし、書くことの新たな導入により、音声言語によるコミュニケーションだけではなく、文字言語の指導に際して、具体的にどのようなことに気をつけていけば良いのかを明確にすることが求められている。

そこで、本稿では、外国語（英語）科の特性を踏まえた上で、深い学びに基づいた小学校外国語科における文字指導のあるべき方策を理論と実践の両方から明らかにしていくことを目的とする。

2. 英単語の形態構造

2.1. 英語の文字体系

外国語の学習にあたって大きな障害となるのが母語の干渉である。したがって、書くことの指導にあたっては、まず英語の文字体系が日本語の文字体系とどのように異なっているかということから検討していくことが必要である。次の例を比較してみよう。

- (2) (a) いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむうゑのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせすん
- (b) イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレソツネナラムウキノオクヤマケフコエテアサキユメ

ミシエヒモセスン

(c) 鹿兒島県鹿兒島市郡元

(3) (a) ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ

(b) abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

第1に、文字数の点から比較してみよう。日本語の文字は、(2a, b)に示すような平仮名やカタカナそれぞれ48文字¹に加えて、(2c)に示すような漢字の数は膨大な数になる。これに対して、英語のアルファベット²は、(3a, b)に示すように26文字しかない。したがって、個々の英語のアルファベットに慣れるのは、数の点だけからみるとそれほど困難なことではない。第2に、文字の種類という点から比べてみる。(2)に示すように、日本語は3種類の文字があるのに対し、(3)に示すように、英語では同じ種類の文字に大文字・小文字の区別がある。したがって、日本人学習者は、英語の大文字と小文字の使い分けがうまくなされない傾向がある。さらに、大文字と小文字のどちらが標準的でどちらが特殊かという意識も薄い場合が多いことに注意しなければならない。第3に、文字の形に注目してみると、日本語の文字は(2)に示すように、いずれの文字であっても、縦横の長さが均一³である。これに対して、英語の文字は、(3a)の大文字の場合、縦の長さは同じであるのに対して横幅には違いが見られる。さらに、(3b)の小文字の場合、横幅の違いだけでなく、縦の長さにも違いがある。標準的な高さに対して、それより上や下に突き出る場合があるという特徴をもつ。したがって、特に小文字に慣れるには、4線の罫線を用いたノートの活用が欠かせない。最後に、日本語の文字自体に名前は付いていないのに対し、英語は文字自体に読み方があると同時に、文字の名前の読み方もある。

以上、単一の文字の形の上だけの違いを見てきた。そこで、次は、単語や句のレベルでの日本語と英語の違いを検討してみる。

(4) (a) 木

(b) tree

(5) (a) アメリカ

(b) America

(6) (a) 白い犬

(b) a white dog

第1の違いとして、単語を構成する文字の数がある。(4a)に見られるように、日本語の単語は1文字で語になり得る⁴のに対して、(4b)に見られるように、英語は不定冠詞⁵を除き、原則として単語は

¹ 実際には、「ゐ」や「ゑ」のように現代の標準日本語では用いられていないものもあるし、促音や拗音に使われる小さい文字もある。さらに、濁点や半濁点のような発音区別符号(diacritical marks)のついた文字もあるが、これらは文字の違いではないので、扱わない。

² 英語のアルファベットは、多くのヨーロッパの言語と同じく、実際にはラテン語の文字である。古英語(Old English)の時代には、ゲルマン諸語に用いられていたルーン文字もいくつか使われていた。また、歴史的にはuとvやiとjのように、それぞれ同じ文字とされていたものも存在する。

³ ここでも促音や拗音に使われる小さい文字は問題にしない。「っ」「ゃ」「ゅ」「ょ」等の文字も大きさが違うだけで、縦横の長さに変わりはない。

⁴ 例に挙げている漢字に限らず「き」という文字でも、木以外に気、期、機、貴、器、樹、季、着、既、希、揮、

複数の文字から構成される。これは、日本語で使われる文字は表意文字であるのに対して、英語の文字は表音文字であるということに起因する。第2の違いは、(5a)に示されるように、日本語の単語は、全て同じ大きさの文字が使われるのが普通⁶であるのに対し、英語は原則として小文字を使い、特別な場合に大文字を使う。たとえば、固有名詞の語頭や、文頭、タイトル等の特別な場合に英語では大文字を使う。しかし、日本語では全ての単語が同じ大きさであることから、英語の単語を記す際にも、縦の長さが均一の大文字だけを使って書きがちで、大文字・小文字の使い分けに無頓着になりやすい。また、略記をする場合にも、日本語は意味的まとまりの最初の語だけを抜き出して、たとえば、文部科学省を文科省のように表記するのに対し、英語では各語の語頭の文字を使って、OECD (Organisation for Economic Co-operation and Development)のように、冠詞や接続詞、前置詞等の機能的な語以外の語頭の頭文字を大文字にするのが一般的である。第3に、(6a)の日本語の場合、句になっても語と語の間は空けないが、(6b)のような英語の場合は、語と語の間にはスペースを置く。したがって、日本人学習者には、lesson1のように、スペースを空けずに書いてしまうことが起こりやすい。関連して、句読点の場合も、日本語ではその前後にスペースを置くことはないが、英語の句読点は、直前ではなく直後にスペースを置く。また、パラグラフの頭の下げ方も、日本語は1文字分だけであるのに対し、英語の文字は横幅が一定しないことと、語は基本的に複数の文字から成ることにより、5文字分下げることが普通である。

これまで、英語の文字体系の特徴を日本語との比較により、文字と語句のレベルで明らかにしてきた。そこで、次節では、語の内部構造を検討していくことにする。

2.2. 英語の形態構造

前節で見たように、英語の文字は表音文字なので、単体では意味を成さず、複数の文字が集まって語となって意味を成す。しかし、語のレベルにならないと意味を成さないというわけでもない。そこで、英語の形態構造の仕組みを検討していくことで、より体系的な書くことの指導に資することを論じていくことにする。

形態論(morphology)の観点からは、形態上の基本的な単位は形態素(morpheme)とされ、語(word)はいくつかの形態素に分解される。理論的に詳細な議論をするのが目的ではないので、ここでは形態素の種類として以下の3つ⁷を取り上げる。すなわち、接頭辞(prefix)、語幹(stem)、接尾辞(suffix)である。(Spencer (1991), Katamba and Stonham (2006), Bauer et al. (2013), Lieber (2016), Lieber and Štekauer (2014)等を参照。) まず、接頭辞の例を見てみよう。

(7) (a) telephone, television, telescope, telepathy [tele-]

輝, 基, 黄, 奇, 旗, 騎, 忌, 軌, 生, 危, 紀, 喜, 規, 起, 企等, さまざまな意味概念を表しうる。

⁵ 英語の不定冠詞も本来は、古英語時代の数詞 an (= “one”)に起因する。

⁶ この場合も、厳密には、促音・拗音の場合の小さな文字が存在するが、これらは独立した文字というより、音韻的には、直前の文字とセットになっていると考えられる。

⁷ 接頭辞と接尾辞を合わせて接辞(affix)というが、接辞には語の途中に挿入される接中辞(infix)や接周辞(circumfix)等も含まれるが、英語の場合には、最初の2つだけで十分であろう。また、語幹以外に語基(base)や語根(root)といった概念もあるが、実践上はそこまで厳密に区別する必要はなからう。

(b) bicycle, bilingual [bi-]

(c) triangle, triple, triathlon [tri-]

(7a)の接頭辞 tele-は「遠い、遠く」というような概念を表す。遠くに音(phone)を伝える電話、遠くに映像(vision)を届けるテレビ、遠くを見る(scope)ことができる望遠鏡、遠くに感情・気持ち(pathy)を伝えるテレパシーのように、カタカナ言葉としてすでに知っている語や今後知ることになるであろう語の理解を深めるためのイメージを接頭辞は教えてくれる。(7b)の接頭辞 bi-は「2つ」という概念をもつ。したがって、この概念が身に付くと、2つの車輪(cycle)から成る(二輪の)自転車や2つの言語の(lingual)使用者である二言語使用者等の意味がより分かりやすくなるであろう。さらに、「単一の」(uni-, mono-)という概念を表す接頭辞のついた unicycle (一輪車) や unique (唯一の), unison (斉唱: 複数で同一の旋律を歌うこと), uniform (制服: 同一・同型の形をした服) や monolingual (単一言語使用者), monotone (単調音), monologue (独白) に触れたとき、個々の単語をばらばらに覚えるのではなく、体系化して学ぶことが可能になる。(7c)の接頭辞 tri-は「3つ」という概念を担うことから、(7b)の bi-とも関連付けることが可能であるし、例に挙げた例の共通性も明確に認識できるであろう。

次に語幹と接尾辞に目を向ける。次の例で考えてみよう。

(8) international [inter- + nation + -al]

英和辞典等に記載している「国際的」というような訳語ではイメージが湧きにくいのが、語幹の nation が「国家」で、接頭辞 inter-が「～間、相互に」、接尾辞が形容詞形成語尾であることが分かると、「さまざまな国家間の／にまたがる」というようによりイメージ化しやすくなる。

このように、語も形態素レベルの意味を理解できるようになると、新たに構築する脳内辞書 (mental lexicon) の各語彙項目 (lexical item) を単に羅列するのではなく、体系化して構造化することが可能である。

(9) afternoon, birthday, homework, bookstore, breakfast

これは、(9)に示すような複合語(compound)の理解も進むと考えられる。正午(noon)の後(after)の時間帯の午後、誕生(birth)の日(day)、家庭(home)での作業・勉強(work)となる宿題、本(book)のお店(store)は分かりやすいが、断食・絶食(fast)を断つ(break)は、夕食と朝食の間が一番長い絶食期間でそれを破るのが朝食という具合に、表したい事物の捉え方における日本語との違いに気づかせることも重要であろう。

ここで、接尾辞について触れておかなければならないことがある。次の例を比べてみよう。

(10) (a) animals, cats, colors, dogs, foods, pens, programs, sports, subjects

(b) bakes, drives, fights, plays, runs, sings, swims, teaches

(11) (a) usually

(b) happy, hungry, salty, sleepy

(c) jogging, playing, reading, running, shopping, swimming⁸

接尾辞には、例(10)に示すような複数形の語尾や人称・数・時制を示す語尾のように、それが付いても品詞の変化を生じない屈折接辞(inflectional affix)だけではなく、(11)に示すように、品詞の変化を生じてしまう派生接辞(derivational affix)も存在する。しかし、後者の方は文法的性質が高く、より複雑⁹なので、小学校段階ではあまり扱われない。

英語の形態構造については、You're (= You are)や don't (= do not)のような短縮形¹⁰や, grandparents' house のような所有格¹¹を表すアポストロフィもあるが、これらについては、小学校段階では特異な形態として自然に慣れるように指導していくことが望ましい。漢字の場合、部首をみればそこに特定の意味が込められていることが分かるのと同様、英語の場合も単語レベルではなく、形態素のレベルでみると、漢字との類似性があることが分かるし、語彙の体系的指導に有益であろう。

3. 綴りと発音の関係

3.1. 子音の綴りと発音

前節では、英語の文字体系と形態構造について論じてきた。小学校外国語活動では、英語の音声に慣れ親しむような活動を行っている。そこで、本節では、英語の綴りと発音との関係について検討していく。まず、子音の綴りと発音との関係について見ていこう。まず、次の例¹²を見てみよう。

(12) (a) banana, bear, baseball, birthday	[b]	(b) cat, cow, cat, corn	[k]
(c) dog, donut, dance, day	[d]	(d) fish, five, fall, festival	[f]
(e) goat, gorilla, game, girl	[g]	(f) hat, horse, head, home	[h]
(g) jam, jet, jungle, juice	[dʒ]	(h) king, koala, keep, kick	[k]
(i) lemon, lion, library, letter	[l]	(j) milk, monkey, melon, mountain	[m]
(k) net, notebook, nature, nest	[n]	(l) pen, pig, park, pizza	[p]
(m) queen, quiz, quail, question	[k]	(n) racket, red, rice, river	[r]
(o) seven, sun, sea, seal	[s]	(p) ten, tiger, tennis, Turkey	[t]
(q) vest, volleyball, very, volunteer	[v]	(r) watch, wolf, window, wood	[w]
(s) box, fox, mix, textbook	[ks]	(t) you, yes, yellow, yogurt	[j]
(u) zebra, zoo, zucchini, Zambia	[z]		
(13) (a) chalk, China, chicken, cheese	[tʃ]	(b) shoes, shrine, shoot, ship	[ʃ]

⁸ 接尾辞-ing は、動名詞を形成する場合と現在分詞を形成する場合があり、それぞれの祖先の語形態は異なっていた。しかし、現代英語では同じ語形になっており、そのために意味・概念的には似た特徴があるが、本稿の目的を越えるので、ここではこれ以上触れない。

⁹ このようにいうと、派生接辞の方が難しそうに思えるかもしれないが、それは形態構造の点からみた場合のことであり、文構造の観点からみると実際には屈折接辞の機能の理解の方がはるかに難しい。

¹⁰ 短縮形は省略と合わせて、情報価値の程度と関係しているが、小学校段階では触れる必要はない。

¹¹ 所有格という格(case)は存在せず、これは Langacker (1999: Ch. 6)でいう参照点構造(reference point construction)のひとつと考えるべきである。

¹² 例の多くは、実際に使われる教材 Let's Try!や We Can!から選んであるが、一部違うものもある。また、We Can!では(12m)を q の文字の発音と考えているが、歴史的に考えても、共時的に見ても qu の発音と捉えるべきである。

(c) **think, Thursday, this, that** [θ]/[ð] (d) **whale, white, what, who** [hw]

(12)の例に見られるように、それぞれの子音字は対応した発音を持つことが分かる。ただし、[k]の発音だけは、c, k, qu の綴りに共通していることに注意する必要がある。(13)の例に見られるように、単一の文字ではなく複数の文字で対応する音を表す場合もあることにも注意すべきであろう。¹³

3.2. 母音の綴りと発音

今度は母音を表す綴りとその発音との対応関係を見ていきたい。しかし、日本語の母音の発音より、英語の母音の発音は多く、それらを表す文字を特定するのは複雑である。また、英語では母音字に対応する発音が1つに限定されていないのが普通であり、紙幅の関係で詳しく論じることではできない。そこで、一番問題となる点に絞って論じることにする。その問題とは、ローマ字を採用する多くの言語では母音を表す文字とその発音はだいたい対応しているのが普通であるが、英語には大きなズレがあるという点である。原因は母音大推移(the Great Vowel Shift)という現象に起因するが、これについての詳細には触れず、母音を表す綴りと発音との英語独特の特徴を明らかにしたい。以下の例を見てほしい。

- (14) admire, advice, advise, alike, alive, arise, arrive, Bible, bite, bride, crime, decline, desire, drive, fine, five, guide, hide, ice, idle, invite, lice, life, like, mice, mile, mine, nine, polite, price, provide, ride, rise, shine, side, slide, strike, tide, time, title, twice, type, wide, wife, wine, wise, while, white, write
- (15) achieve, agree, be, bee, beef, believe, brief, cheek, cheese, chief, deed, deep, degree, feed, feel, feet, field, free, freeze, green, greet, grief, he, heel, keen, keep, meet, need, needle, niece, piece, queen, relief, see, seed, seek, seem, seen, she, sheep, sheet, sleep, sleeve, speech, speed, steel, street, succeed, sweet, teeth, thief, three, tree, we, weed, week
- (16) appeal, beam, bean, beast, beat, bleach, breathe, cease, cheap, cheat, clean, cleave, conceal, deal, decrease, defeat, dream, each, eager, eagle, ease, east, eat, feast, feature, heal, heat, heath, increase, lead (v.), leaf, leap, lease, least, leave, meal, mean, meat, peace, please, reach, read, reap, reason, repeat, reveal, sea, seal, season, seat, speak, steal, stream, teach, team, treat, weak, weave, wheat, zeal
- (17) able, aeroplane (airplane), ace, age, arrange, awake, bake, base, behave, blame, blaze, brave, cage, cake, came, case, cave, change, cradle, date, debate, engage, escape, fable, face, fade, fate, game, gate, grape, grave, haste, hate, lake, lane, late, make, made, male, name, page, persuade, place, quake, race, range, safe, sake, same, save, shade, shake, snake, shame, shape, spade, stage, state, stave, strange, take, tale, tame, table, taste, wave
- (18) about, account, allow, aloud, amount, announce, bough, bound, brown, cloud, count, cow, crowd, doubt, down, found, ground, hour, house, how, loud, mouse, mouth, mount, mountain, noun, now, our, out, pound, renown, shower, sound, south, thousand, towel, tower, town, vowel

¹³ 今回は綴りの方に焦点を置くので、個々の発音にはこれ以上立ち入らない。また、発音されない綴り (**know, gnu, write, night** 等) もあるが、これらについても扱わない。

(19) bloom, choose, cool, do, food, fool, gloom, goose, hoop, lose, loose, moon, move, noon, pool, proof, prove, roof, root, school, smooth, soon, spoon, stool, too, tool, tooth, who, whom, whose

(20) alone, approach, arose, boast, boat, bone, broke, close, clothe, coach, coal, coast, coat, cope, devote, drove, float, frozen, grove, home, hope, load, loan, mode, noble, nose, notebook, oak, pole, propose, road, rope, smoke, soak, soap, sole, stone, stove, stroke, suppose, those, throat, toast, toe, vote, whole, woke, wrote, yoke

(14)-(20)の例をみると分かるように、母音字の綴りと発音には一定の規則性が存在する。それらをまとめると次のようになる。

(21) (a) [a+子音字+e]の a の発音は、原則として[ei]になる。

(b) [i+子音字+e]の i の発音は、原則として[ai]になる。

(c) [o+子音字+e]の o の発音は、原則として[oo]になる。

(22) (a) 綴り ea, ee, ie は、[i:]と発音される傾向が強い。

(b) 綴り oa は、[oo]と発音される傾向が強い。

(c) 綴り ou, ow は、[aʊ]と発音される傾向が強い。

(d) 綴り oo は、[u:]と発音される傾向が強い。

(21)の原則に示されるように、特に語末に e の綴りがある場合、その前の母音字は二重母音¹⁴化しやすい。

4. 英語の文における文字指導

小学校外国語活動では、基本的に文字を意識的には扱わず、英語の音声に触れることで、さまざまな表現に慣れ親しむコミュニケーション活動を行うのが主眼である。そこで、実際に音声に触れる場合によく活用されるのがチャンツである。それらは、だいたい語のレベルでのチャンツである。しかし、コミュニケーション活動を行う場合、文を使う場面もよく出てくる。その際、先に論じたように、英語は語と語の間にスペースを空けるので、発音もそこで切ってしまう傾向が生じる。ところが、実際の発話では近接音による音変化（同化、融合、脱落、連結等）により、文レベルでも語と語を越えてリズム単位を構成する。それゆえ、語レベルのチャンツから文レベルのチャンツも英語の形態的特性に引きずられることなく、発話できるような指導が文字指導にも欠かせない。

そこで、これらを踏まえた上での鹿児島大学教育学部附属小学校での実践例を示す。チャンツとは、英語特有の音と音のつながりやリズムに楽しく慣れ親しむことを容易にする活動である。附属小では、以下のように、低学年では主に単語レベルの語を扱う。

【動物】 dog, cat, rabbit, bear, giraffe, monkey, cow, lion

【果物】 orange, apple, grapes, peach, banana, watermelon, strawberry

【国名】 Japan, America, France, Germany, Taiwan, Australia, China, South Korea

¹⁴ 英語の二重母音は、日本語の母音の連続とは異なる性質をもつが、本論は綴りの方に焦点を当てているので、音韻上の問題は扱わない。

【天気】 sunny, rainy, windy, snowy, stormy

【数字】 one, two, three, four, five, six,...

【物語】 3びきのこぶた: little pigs, mother pig, straw man, stick man, brick man, wolf

スイミー: swimmy, tuna fish, jelly fish, red fish

ただし、外国語はコミュニケーションの学習であるため、単語レベルを扱うだけでなく、簡単なセンテンスを用いた文レベルでの英語でのやりとりを低学年においても行う。その活動に向けて、文レベルの音と音のつながりやリズムに慣れ親しませるために、文レベルでのリズムチャンツも行っている。

【例】 What time is it? It's ~o'clock. / What food do you like? I like~. / How's the weather? It's ~
高学年においては、以下のように、複数の文を用いてリズムチャンツを行う場合もある。

【Unit 3: He is famous, She is great.】

A: Hello. My name is A.

B: Hi. My name is B.

A: Let's begin our Quiz.

B: Hint 1. I like Sushi.

A: Hint 2. I like rock music.

B: Hint 3. I can ice-skate.

A: Who is he?

上記のように複数の文を扱う場合、一度に全てを扱うのではなく、途中で区切って提示したり、パートごとに分けて発話させたりするなど、スモールステップで行うことが慣れ親しませるためにはより効果的である。

第6学年における「Unit 4: I like my town～伝え合おう！鹿児島や外国のよかところ～」の学習では、鹿児島大学の留学生に、鹿児島のおすすめの場所を紹介する活動を行う。その際、おすすめの特徴について、自分が伝えたい情報をより確かに相手に伝えるためには、重点となる語(名詞、動詞)を発話する際に「強弱をつける」「速度を変える」などの工夫をすることが効果的である。

例えば、かごしま水族館を紹介する場合、以下のような強勢¹⁵が考えられる。

Hello. This is Kagoshima Aquarium. (写真を見せながら)

You can see some dolphins.

上記のような場面において、「強弱をつける」「速度を変える」などの工夫に子どもに気付かせるためには、ペアやグループでの学び合いを導入することが効果的であると考えられる。その際、各自の考えを可視化しながら深めることができるようにするために、小ボードを活用し、文中で強弱を付ける部分や、速度を変えたりする箇所に印を付けさせる。

5. むすび

¹⁵ 太字の部分が強勢の置かれた音節の核である。

以上見てきたように、外国語の学習を阻害する要因のひとつは母語の干渉である。特に、英語の場合、音に慣れることとは別に文字を導入するとき、英語の文字体系、形態構造、文構造の違いに着目した指導が必要となる。また、文字指導は、文字と発音との関係だけでなく、それらと意味との対応関係も大事である。このような体系的な学びは、小学校外国語科だけに閉じた学びであってはならない。小・中・高・大とつながりのある系統的な学びを意識する必要があるが指導者には求められる。と同時に、小学校の他の教科との構造的なつながりのある学びも必要である。文字指導においては、国語科とのつながりのある学びも重要であろう。

国語科では、第3学年において、ローマ字(訓令式)を学習する。ここでは、あくまでも「国語」としての位置づけであり、外国語の学習におけるヘボン式とは違う点があることに留意する必要がある。例えば、以下のような点である。

① 「し(si/shi)」「ち(ti/chī)」「つ(tu/tsu)」「ふ(hu/fu)」「じ(zi/ji)」「ぢ(di/ji)」「づ(du/zu)」「しゃ(sya/sha)」「しゅ(syu/shu)」「しょ(syo/sho)」「ちゃ(tya/cha)」「ちゅ(tyu/chu)」「ちょ(tyo/cho)」「じゃ(zya/ja)」「じゅ(zyu/ju)」「じょ(zyo/jo)」の違い

② 「ん」の表記 (b, m, p の前では m で表記)

群馬：Gumma

③ 長音の表記

Tôkyô

上記のような訓令式とヘボン式の違いがあり、訓令式での表記とヘボン式での表記を混同してしまう子どもが見られる。そのため、特に、外国語学習において、ヘボン式で語を表記させる際には、ローマ字との違いに気付かせながら書かせる等の配慮が必要である。

訓令式とヘボン式には違いがある一方で、26文字のアルファベットを用いて言葉を表記する点では共通である。そのため、特に、アルファベットの名称の読み方と文字の形のつながりを捉えさせる学習においては、つながりを意図して指導することが効果的である。新教材 Let's try! 1 (第3学年用) においては、大文字を、Let's try! 2 (第4学年用) においては、小文字を扱う内容が設定されている。

小学生の生活と結びついた学びには、以下のような方法が挙げられる。

- ① 文字学習の導入において、町中にある看板を提示したり、身近にある物の写真(消しゴムの MONO 等)を提示したりする。ただし、看板はロゴのようにになっているものがあり、通常の表記とは異なるものも多く見られるため、扱う際には留意が必要である。
- ② 第3学年における大文字、第4学年における小文字の学習において、文字の形の特徴に気付かせるために、身近にあるものをアルファベットに見立てて遊ぶ活動を行う。例えば、校庭にあるブランコの柱の形を「A」と見立てたり、雑巾の縫い目を「x」と見立てたりする。
- ③ 行事との関連で、第2学年「もうすぐクリスマス」において ALT に、第6学年「台北の友達にクリスマスカードを送ろう」において台北教育大学の友達に、クリスマスカードを送る学習を行う。その際、自分のオリジナルカードに、Merry Christmas や Happy New Year などのフレー

ズを書き写す活動を行う。

- ④ 第5学年「Let's open our restaurant～3つ星レストランを開こう～」の学習において、グループごとにオリジナルレストランを開く際、メニューや店名が書かれたお店の看板を書く活動を行う。

以上を踏まえて、音声中心から書くことも交えた深い学びが重要であろう。

参考文献

- Adelman, James S. (ed.) (2012) *Visual Word Recognition: Models and Methods, Orthography and Phonology*. Volume 1. Psychology Press, London.
- Bauer, Laurie, Rochelle Lieber and Ingo Plag (2013) *The Oxford Reference Guide to English Morphology*. Oxford University Press, Oxford.
- Katamba, Francis and John Stonham (2006) *Morphology*. Second edition. Palgrave Macmillan, Basingstoke.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Lieber, Rochelle (2016) *Introducing Morphology*. Second edition. Cambridge University Press, Cambridge.
- Lieber, Rochelle and Pavol Štekauer (eds.) (2014) *The Oxford Handbook of Derivational Morphology*. Oxford University Press, Oxford.
- 文部科学省 (2017a) 『小学校学習指導要領』
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf) (最終閲覧日：2018年9月5日)
- 文部科学省 (2017b) 『小学校学習指導要領解説：外国語活動・外国語編』
(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/05/07/1387017_11_1.pdf) (最終閲覧日：2018年9月5日)
- 清水建二，すずきひろし (2018) 『英単語の語源図鑑』かんき出版，東京。
- Spencer, Andrew (1991) *Morphological Theory: An Introduction to Word Structure in Generative Grammar*. Blackwell, Oxford.